

# 大齋期の晩堂課

注意 譜面中、五線譜上に **||o||** とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。



司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

誦經) アミン。

われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き  
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

てん おうなぐさ もの しんじつ しん あ ところ もの み ところ もの ばんぜん  
天の王 慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善

ほうぞう もの せいめい たも しゅ きた われら うち お われら もろもろ けがれ  
の寶蔵なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より

いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま  
潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら  
に行わるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

ら きょうあく すく たま  
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだし くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋、國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

誦經) アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光 栄は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に。アミン。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩 拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩 拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩 拜俯伏せん、

※ 大齋第一週には【 第69聖詠 】に続けてアンドレイの大規模を行う。三歌齋經を見る。

※ 第一週以外は直ちに【 第4聖詠 】へ。

### 【 第69聖詠 】

かみ すみやか われ すく しゅ すみやか われ たす たま わ たましい もと もの ねが  
神よ、速 に我を救え、主よ、速 に我を助け給え。我が 靈 を求むる者は、願  
わくは 恥 を得て 辱 を受けん、 禍 を我に望む者は、願わくは 退 けられて 嘲 けられ  
ん。我に向いて 嘻嘻と云う者は、其の我を 辱 しむるに因りて、願わくは 退 けられん。  
およ なんぢ もと もの ねが なんぢ ため よろこ たのし なんぢ すくい あい もの  
凡そ爾 を求むる者は、願わくは 爾 の爲に 喜 び 樂 まん、爾 の 救 を愛する者は、  
ねが つね かみ おおい い われ まづ とぼ かみ われ いた たま なんぢ  
願わくは常に神は 大 なりと云わん。我は貧しくして 乏 し、神よ、我に 格 り 給 へ、 爾  
われ たすけ われ すく もの しゅ おそな なか  
は我の 助 なり、我を 救 う者なり、主よ、 遅 わる 母れ。

※ アンドレイの大規模へ

### 【 第4聖詠 】

わ ぎ かみ わ よ とき われ き たま わ せまき あ とき なんぢわれ ひろき あた  
吾が義の神よ、吾が籲ぶ時、我に聴き給え。我が 狭 に在る時、爾 我に 廣 を與えた  
り。我を 憐 みて、我が 禱 を聴き給え。人の子よ、我が 榮 の 辱 しめらるること 何 の時  
に 至るか、 爾 等 虚 を好み、 詭 を求むること 何 の時に 至るか。 爾 等主が其  
せいしゃ わか おのれ ぞく し われよ しゅ これ き いか つみ おか なか  
聖 者を析ちて 己 に屬せしめしをを知れ、我 籲 べば、主は之を聴く。怒りて 罪 を犯す母  
れ、榻に在るとき 爾 等の 心 に謀りて、 己 を鎮めよ。義の 祭 を獻げて主を恃め。多く  
もの い だれ われら ぜん しめ しゅ なんぢ かんばせ ひかり われら あらわ たま なんぢ  
の我が 心 に 樂 を満つるは、彼等が 餅 と 酒 と 油 に 豊 なる時より勝れり。我 安 然と

して偃し寝ぬ、蓋 主よ、獨 爾は我に無難にして世を渡らしめ給う。

## 【 第6聖詠 】

主よ、爾の 憤 を以て我を責むる母れ、爾の 怒 を以て我を罰する母れ。主よ、  
我を 憐み 給え、我 弱ければなり、主よ、我を 醫し 給え、我が 骸は 慄き、我が 靈 も  
甚 慄 ければなり、爾 主よ、何の 時に 至るか。主よ 面を 轉し、我が 靈 を 免れ  
しめ、爾の 憐 に由りて我を 救い 給え。蓋 死の中には 爾を 記憶するなし、墓の中に  
は 誰か 爾を 讃揚 せん。我 嘆 にて 憊れたり、毎夜我が 榻を 滌い、我が 涙 にて 我の 褥  
を 濡す。我が 眼は 憂 に因りて 枯れ、我が 諸の 敵に 由りて 衰えたり。凡そ 不法を 行  
う者は 我を 離れよ、蓋 主は我が 泣く 聲を 聞けり、主は我が 願を 聴き 給えり、主は我が  
禱を 納れんとす。願わくは我が 諸の 敵は 辱しめられて 痛く 撃たれん、願わくは 退き  
て 俄に 愧を得ん。

## 【 第12聖詠 】

主よ、我を 全く 忘ること 何の 時に 至るか、爾の 面を 我に 隠すこと 何の 時に  
至るか、我が 己の 靈の中に 謀り、心の中に 日夜 憂を 懐くこと 何の 時に 至るか、  
我が 敵の 我に 高ぶること 何の 時に 至るか。主 我が 神よ、願 みて 我に 聴き 給え。我が 目  
を 明にして、我を 死の 寐に 寝ねざらしめ 給え、我が 敵が 我は 彼に 勝てりと 曰わざらん 爲、  
我を 攻むる 者が 我の 撼く 時に 喜ばざらん 爲なり。我 爾の 憐を 恃み、我が 心 爾  
の 救を 喜ばん、我 恩を 施す 主を 讃め 頌い、至 上なる 主の名を 崇め 歌わん。

光 榮は 父と 子と 聖 神に 歸す、今も 何時も 世に。アミン。

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光 榮は 爾に 歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光 榮は 爾に 歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ、光 榮は 爾に 歸す、

主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

光 榮は 父と 子と 聖 神に 歸す、今も 何時も 世に。アミン。

司祭) <sup>かみ われら とも</sup> 神は我等と偕にす、<sup>いほうじん</sup> 異邦人よ、<sup>これ し したが</sup> 此を知りて 従えよ、<sup>かみ われら とも</sup> 神は我等と偕にすればなり、

かみはわれらとともにす、いほうじんよ、  
神我等借異邦人  
これをしりてしたがえよ。かみはわれ  
此知従神我  
らとともにすればなり。

司祭) <sup>ち はて</sup> 地の極までも之を聴け、<sup>これ き</sup>

かみはわれらとともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>けんりよく</sup> 権力ある者よ、<sup>もの</sup> 従え、<sup>したが</sup>

かみはわれらとともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>またいきおい</sup> 復勢を張らば、<sup>は</sup> 復敗られん、<sup>またやぶ</sup>

かみはわれらとともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>はかりごと</sup> 謀を設けば、<sup>もう</sup> 主は之を毀たん、<sup>しゅ これ こぼ</sup>

かみはわれらとともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>ことば</sup> 言を出さば、<sup>いだ</sup> 必成らざらん、<sup>かならずな</sup>

かみはわれらとともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>なんぢら</sup> 爾等の畏るる所は我等畏れず、<sup>おそ</sup> 驚かず、<sup>ところ われらおそ</sup> <sup>おどろ</sup>



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>しゅわ かみ もつ せい な かれ わ おそれ</sup> 主我が神を以て聖と爲す、彼は我が畏とならん、



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>われかれ たの かなら われ せい</sup> 我彼を頼まば必ず我を聖にせん、



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>われかれ のぞ かれ よ すくい え</sup> 我彼を望み、彼に因りて救を得ん、



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>み われおよ かみ われ あた しよし ここ あ</sup> 視よ、我及び神が我に與えたる諸子は此に在り、



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>くらやみ うち ゆ たみ おおい ひかり み</sup> 幽闇の中を行く民は大なる光を見たり、



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>し かげ ち お もの ひかり なんぢら てら</sup> 死の蔭の地に居る者よ、光は爾等を照さん、



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>けだしおさなご われら ため うま こ われら たま</sup> 蓋嬰は我等の爲に生れ、子は我等に賜わりたり、



かみはわれらととともにすればなり。  
神我等借

司祭) <sup>けんぺい そのかた あ</sup> 權柄は其肩に在り、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>そのわへい おわり</sup> 其和平は終なし、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>そのな おおい ぎじ ししや とな</sup> 其名は大なる議事の使者と稱えらる、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>しんみょう ぎし とな</sup> 神妙なる議士と稱えらる、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>だいのう かみ しゅさい わへい きみ とな</sup> 大能の神、主宰、和平の君と稱えらる、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>らいせい ちち とな</sup> 來世の父と稱えらる、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>かみ われら とも いほうじん これ し したが</sup> 神は我等と借にす、異邦人よ、此を知りて從えよ、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>こうえい ちち こ せいしん き</sup> 光榮は父と子と聖神に歸す、

かみはわれらととともにすればなあり。  
神我等借

司祭) <sup>いま いつ よよ</sup> 今も何時も世に、アミン、

か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
 神 我 等 借

か み は わ れ ら と と も に す 、 い ほ う じ ん よ 、  
 神 我 等 借 異 邦 人

こ れ を し り て し た が え よ 。 か み は わ れ  
 此 知 従 神 我

ら と と も に す れ ば な り 。  
 等 借

誦經) <sup>しゅ ひ おく なんぢ かんしゃ きゅうせいしゅ もと われ つみ くれ よる わた</sup>  
 主よ、日を送りて爾に感謝す、救世主よ、求む、我に罪なく暮と夜とを度らし

<sup>われ すく たま</sup>  
 めて、我を救い給え。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き</sup>  
 光榮は父と子と聖神に歸す。

<sup>しゅさい ひ おく なんぢ さんえい きゅうせいしゅ もと われ いざない くれ よる わた</sup>  
 主宰よ、日を送りて爾を讚榮す、救世主よ、求む、我に誘なく暮と夜とを度

<sup>われ すく たま</sup>  
 らしめて、我を救い給え。

<sup>いま いつ よよ</sup>  
 今も何時も世世に、アミン、

<sup>せい もの ひ おく なんぢ さんしょう きゅうせいしゅ もと われ ぶなん くれ よる</sup>  
 聖なる者よ、日を送りて爾を讚頌す、救世主よ、求む、我に無難に暮と夜と

<sup>わた われ すく たま</sup>  
 を度らしめて、我を救い給え。

<sup>むけい せい や うた なんぢ ほ あ りくよく ぞうぶつ た</sup>  
 無形の性のヘルヴィムは息めざる歌にて爾を讚め揚げ、六翼の造物セラフィムは絶えざ

<sup>こえ なんぢ とうと うた てんし ばんぐん せいさん うた なんぢ あが ほ けだしなんぢ</sup>  
 る聲にて爾を尊み歌い、天使の萬軍は聖三の歌にて爾を崇め讃む、蓋爾は

<sup>ばんゆう さき みづか そん ちち どうむげん なんぢ こ たも どうそん いのち しん</sup>  
 萬有の先より自ら存する父にして、同無原なる爾の子を有ち、同尊なる生命の神を

<sup>いだ さんい わか あらわ たま</sup>  
 出し、三位の分れざるを顯し給う。

<sup>しせい どうていちよ かみ はは した せいげん み これ つと もの よげんしゃおよ ちめい</sup>  
 至聖なる童貞女・神の母と、親しく聖言を見て之に役めし者と、預言者及び致命

<sup>しゃ われ し いのち たも よ われら ため せつ いの たま われらみなくなん うち</sup>  
 者の群よ、死せざる生命を有つに因りて、我等の爲に切に祈り給え、我等皆苦難の中に

<sup>あ ねが われらきょうあく いざない のが てんし うた うた せい せい せい</sup>  
 在ればなり。願わくは我等凶惡の誘を遁れて、天使の歌を歌わん、聖、聖、聖な

<sup>さんせい しゅ われら あわれ すく たま</sup>  
 る三聖の主よ、我等を憐みて救い給え、アミン。

【 信經 】

われしん ひとつ かみ ちち ぜんのおしや てん ち み み ばんぶつ つく しゅ また  
 我信ず、一の神・父・全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を、又  
 しん ひとつ しゅ かみ どくせい こ よろづよ さき ちち うま ひかり  
 信ず、一の主イイスス・ハリストス神の獨生の子、萬世の前に父より生れ、光より  
 ひかり まこと かみ まこと かみ うま もの つく あら ちち いったい ばんぶつ  
 の光、眞の神よりの眞の神、生れし者にて造られしに非ず、父と一體にして萬物  
 かれ つく われらひとびと ため またわれら すくい ため てん くだ せいしんおよ どうていちよ  
 彼に造られ、我等人人の爲、又我等の救の爲に天より降り、聖神及び童貞女マ  
 リヤより身を取り人と爲り、我等の爲にポンティイ・ピラトの時、十字架に釘うたれ 苦  
 う ほうむ だいさんじつ せいしよ かな ふくかつ てん のぼ ちち みぎ ざ こうえい あらわ  
 を受け葬られ、第三日に聖書に應いて復活し、天に升起父の右に坐し、光榮を顯  
 い もの し もの しんばん ため またきた そのくにおわり またしん  
 して生ける者と死せし者とを審判する爲に還來り、其國終なからんを。又信ず、  
 せいしん しゅ いのち ほどこ もの ちち い ちちおよ こ とも おが ほ よげんしゃ もつ  
 聖神・主・生を施す者、父より出で、父及び子と共に拜まれ讃められ、預言者を以  
 かつ い またしん ひとつ せい おおやけ しと きょうかい われみと ひとつ せんれい  
 て嘗て言いしを。又信ず、一の聖なる公なる使徒の教會を、我認む、一の洗禮、  
 もつ つみ ゆるし う われのぞ ししゃ ふくかつ ならび らいせ いのち  
 以て罪の赦を得るを、我望む、死者の復活、並に來世の生命を、アミン。

司祭) せいせい ちよさい しょうしんぢよ われらざいにん ため いの たま  
 至聖なる女宰・生神女よ、我等罪人の爲に祈り給え。

せいせい ちよさい しょうしんぢよ われらざいにん ため いの たま  
 至聖なる女宰・生神女よ、我等罪人の爲に祈り給え。

し せ い な る ち よ さ い し ょ う し ん ぢ よ よ 、 わ れ ら ざ  
 至 聖 女 宰 生 神 女 我 等 罪  
 い に ん の た め に い の り た ま え 。  
 人 爲 祈 給

司祭) せいてんしおよ てんししゅ ぜんぐん われらざいにん ため いの たま  
 聖天使及び天使首の全軍よ、我等罪人の爲に祈り給え。

せ い て ん し お よ び て ん し し ゅ の ぜん ぐ ん よ 、 わ れ ら  
 聖 天 使 及 天 使 首 全 軍 我 等  
 ざ い に ん の た め に い の り た ま え 。  
 罪 人 爲 祈 給

司祭) せいよげんしゃ わ しゅ ぜんくじゅせん われらざいにん ため いの たま  
 聖預言者イオアン、吾が主イイススハリストスの前驅授洗よ、我等罪人の爲に祈り給  
 え。



せいよげんしゃイオアン、わがしゅいイススハリストスの  
 聖預言者 吾主

ぜんくじゅせんよ、われらざいにんのためいの  
 前駆授洗 我等罪人 爲 祈

りたまえ。  
 給

司祭) こうめい せいしと よげんしゃ ちめいしゃ およ しょせいじん われらざいにん ため いの たま  
 光明なる聖使徒、預言者、致命者、及び諸聖人よ、我等罪人の爲に祈り給え。

こうめいなるせいしと、よげんしゃ、ちめいしゃ、  
 光明 聖使徒 預言者 致命者

およびしょせいじんよ、われらざいにんのため  
 及 諸聖人 我等罪人 爲

にいのりたまえ。  
 祈 給

司祭) こくしょうほうしん わ しょしんぶ ぜんせかい ぼくしゃおよ きょうし われらざいにん ため いの たま  
 克肖捧神なる我が諸神父、全世界の牧者及び教師よ、我等罪人の爲に祈り給え。

こくしょうほうしんなるわがしょしんぶ、ぜんせかいの  
 克肖捧神 我 諸神父 全世界

ぼくしゃおよびきょうしよ、われらざいにんのため  
 牧者及 教師 我等罪人 爲

めにいのりたまえ。  
 祈 給

司祭) こうめい あしとにほん だいしゅきょうせい われらざいにん ため いの たま  
 光明なる亜使徒日本の大主教聖ニコライよ、我等罪人の爲に祈り給え。

こうめいなるあしとにほんのだいしゅきょうせいニ  
 光明 亜使徒日本 大主教 聖

コ ラ イ よ 、 わ れ ら ざ い に ん の た め に い の り  
我 等 罪 人 爲 祈  
た ま え 。  
給

司祭) <sup>とうと</sup>尊<sup>いのち</sup>くして<sup>ほどこ</sup>生命<sup>じゅうじか</sup>を<sup>やぶ</sup>施<sup>はか</sup>す<sup>せい</sup>十<sup>ちから</sup>字<sup>われらざいにん</sup>架<sup>はな</sup>の<sup>はな</sup>敗<sup>はな</sup>られ<sup>はな</sup>ず<sup>はな</sup>量<sup>はな</sup>られ<sup>はな</sup>ざる<sup>はな</sup>聖<sup>はな</sup>なる<sup>はな</sup>力<sup>はな</sup>よ<sup>はな</sup>、<sup>はな</sup>我<sup>はな</sup>等<sup>はな</sup>罪<sup>はな</sup>人<sup>はな</sup>を<sup>はな</sup>離<sup>はな</sup>る

<sup>なか</sup>る<sup>なか</sup>勿<sup>なか</sup>れ。

と う と く し て い の ち を ほ ど こ す じ ゅ う じ か の や  
尊 生 命 施 十 字 架 敗  
ぶ ら れ ず は か ら れ ざ る せ い な る ち か ら よ  
量 聖 力  
わ れ ら ざ い に ん を は な る る な か れ 。  
我 等 罪 人 離 勿

司祭) <sup>かみ</sup>神<sup>われらざいにん</sup>よ<sup>きよ</sup>、<sup>たま</sup>我<sup>たま</sup>等<sup>たま</sup>罪<sup>たま</sup>人<sup>たま</sup>を<sup>たま</sup>浄<sup>たま</sup>め<sup>たま</sup>給<sup>たま</sup>え。

か み よ 、 わ れ ら ざ い に ん を き よ め た ま  
神 我 等 罪 人 浄 給  
え 。

司祭) <sup>かみ</sup>神<sup>われらざいにん</sup>よ<sup>きよ</sup>、<sup>われら</sup>我<sup>われら</sup>等<sup>われら</sup>罪<sup>われら</sup>人<sup>われら</sup>を<sup>われら</sup>浄<sup>われら</sup>めて<sup>われら</sup>、<sup>われら</sup>我<sup>われら</sup>等<sup>われら</sup>を<sup>われら</sup>憐<sup>われら</sup>み<sup>われら</sup>給<sup>われら</sup>え。

か み よ 、 わ れ ら ざ い に ん を き よ め て 、 わ れ  
神 我 等 罪 人 浄 我  
ら を あ わ れ み た ま え 。  
等 憐 給

誦經) ※曜日により替える。 ※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

月・水曜日) <sup>かみ わ め あきらか</sup> ハリストス神よ、我が目を <sup>われ し ねむり い</sup> 明にして、我を死の <sup>たま わ てき</sup> 寐に寝ねざらしめ給え、我が敵

<sup>われ かれ か い ため</sup>  
が我は彼に勝てりと曰わざらん爲なり。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き</sup>  
光栄は父と子と聖神に歸す。

<sup>かみ わ たましい ふせ まも もの たま われおお あみ うち ゆ よ じんじ しゅ</sup>  
神よ、我が <sup>われ これ のが すく たま なんぢひと あい しゅ</sup> 靈を扞ぎ衛る者となり給え、我多くの網の中を行くに囚る、仁慈の主よ、  
我を之より脱れしめて救い給え、爾人を愛する主なればなり。

<sup>いま いつ よよ</sup>  
今も何時も世世に。アミン。

<sup>しょうしんどうていぢょ われらつみ おのれ いさみ よ なんぢ うま もの いの たま</sup>  
生神童貞女よ、我等罪ありて己の勇なきに囚り、爾より生れし者に祈り給え、  
<sup>けだしはは いのり おお しゅさい じれん う しじょう もの ざいにん いのり しりぞ なか</sup>  
蓋母の禱は多く主宰の慈憐を得べし。至淨の者よ、罪人の祈を斥くる勿れ、  
<sup>われら ため あま くるしみ う たま もの じんじ ひと すく よく</sup>  
我等の爲に甘んじて苦を受け給いし者は仁慈にして人を救うことを能すればなり。

火・木曜日) <sup>しゅ なんぢ わ み てき ねむ</sup> 主よ、爾は我が見えざる敵の眠らざるを知り給えり、我を造りし者よ、爾は亦

<sup>わ ふとう にくたい よわ し たま ゆえ わ しん なんぢ て わた なんぢ じんじ つばさ</sup>  
我が不當なる肉體の弱きを知り給えり、故に我が神を爾の手に託す、爾が仁慈の翼

<sup>われ おお し ねむり い たま わ たましい め あきらか なんぢ せいげん</sup>  
にて我を覆いて、死の寐に寝ねざらしめ給え、我が <sup>もつ わ たのしみ な たま よ とき われ おこ なんぢ さんえい たま なんぢひとりじんじ</sup> 靈の目を明にして爾の聖言を

以て我が <sup>ひと あい しゅ</sup> 樂と爲し給え、宜き時に我を興して、爾を讚榮せしめ給え、爾獨仁慈

にして人を愛する主なればなり。

<sup>しゅわ かみ かえり われ き たま</sup>  
主吾が神よ、願みて我に聴き給え。

<sup>しゅ なんぢ しんぱん なん おそ しよてんし まえ た もろびと ひ い きろく</sup>  
主よ、爾の審判は何ぞ畏るべき、諸天使は前に立ち、衆人は引き入れられ、記録は

<sup>ひら おこない しら いねん ただ とき われつみ おい はら もの なん さばき う</sup>  
披かれ、行は鞫べられ、意念は糾さる時、我罪に於て生まれし者は何の判を受

<sup>だれ わ ため ひ け だれ わ ため くらやみ てら しゅ われただなんぢ あわれみ</sup>  
けんか、誰か我が爲に火を滅し、誰か我が爲に闇冥を照さん、主よ、我唯爾の憐を

<sup>たの なんぢひと いつくし しゅ</sup>  
恃む、爾人を慈む主なればなり。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き</sup>  
光栄は父と子と聖神に歸す。

<sup>かみ むかしつみ おんな なみだ たま ごと われ なみだ たま われ まよい みち すく</sup>  
神よ、昔罪ある女に涙を賜いし如く、我にも涙を賜いて、我を迷の路より救

<sup>なんぢ あし うるお つうかい もつ つく わ きよ いのち こうば あぶら なんぢ</sup>  
いし爾の足を沾さしめ、痛悔を以て造られし我が清き生命を香しき膏として爾

に<sup>ささ</sup>げ<sup>たま</sup>しめ<sup>われ</sup>給<sup>なんぢ</sup>え、我<sup>した</sup>も<sup>こえ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>の<sup>しん</sup>慕<sup>なんぢ</sup>う<sup>すく</sup>べき<sup>あんぜん</sup>聲<sup>ゆ</sup>、爾<sup>い</sup>の<sup>い</sup>信<sup>い</sup>は<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>を<sup>い</sup>救<sup>い</sup>えり、安<sup>い</sup>然<sup>い</sup>と<sup>い</sup>して<sup>い</sup>往<sup>い</sup>けと<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>

う<sup>き</sup>を<sup>ため</sup>聽<sup>き</sup>かん<sup>ため</sup>爲<sup>き</sup>なり。

いま いつ よよ  
今も何時も世に。アミン。

生<sup>しょうしんぢよ</sup>神<sup>われ</sup>女<sup>なんぢ</sup>よ、我<sup>はぢ</sup>爾<sup>え</sup>を<sup>たのみ</sup>辱<sup>すくい</sup>を<sup>え</sup>得<sup>しじょう</sup>ざる<sup>もの</sup>憑<sup>なんぢ</sup>特<sup>てんたつ</sup>として<sup>い</sup>救<sup>い</sup>を<sup>い</sup>得<sup>い</sup>ん、至<sup>い</sup>淨<sup>い</sup>の<sup>い</sup>者<sup>い</sup>よ、爾<sup>い</sup>の<sup>い</sup>轉<sup>い</sup>達<sup>い</sup>を

得<sup>え</sup>て<sup>おそ</sup>畏<sup>なんぢ</sup>れ<sup>おおい</sup>ざら<sup>よろい</sup>ん、爾<sup>い</sup>の<sup>い</sup>覆<sup>い</sup>を<sup>い</sup>鎧<sup>い</sup>の<sup>い</sup>如<sup>い</sup>く<sup>い</sup>衣<sup>い</sup>、爾<sup>い</sup>が<sup>い</sup>有<sup>い</sup>能<sup>い</sup>の<sup>い</sup>佑<sup>い</sup>助<sup>い</sup>を<sup>い</sup>受<sup>い</sup>けて<sup>い</sup>我<sup>い</sup>が<sup>い</sup>敵<sup>い</sup>を<sup>い</sup>驅<sup>い</sup>り、之<sup>い</sup>

に<sup>か</sup>勝<sup>ゆえ</sup>たん、故<sup>いの</sup>に<sup>なんぢ</sup>祈<sup>よ</sup>りて<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>に<sup>い</sup>呼<sup>い</sup>ぶ、女<sup>い</sup>宰<sup>い</sup>よ、爾<sup>い</sup>の<sup>い</sup>祈<sup>い</sup>禱<sup>い</sup>を<sup>い</sup>以<sup>い</sup>て<sup>い</sup>我<sup>い</sup>を<sup>い</sup>救<sup>い</sup>い<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え、爾<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>り身<sup>い</sup>

を<sup>と</sup>取<sup>かみ</sup>りし<sup>い</sup>神<sup>い</sup>の子<sup>い</sup>の<sup>い</sup>力<sup>い</sup>を<sup>い</sup>以<sup>い</sup>て<sup>い</sup>我<sup>い</sup>を<sup>い</sup>暗<sup>い</sup>き<sup>い</sup>眠<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>り起<sup>い</sup>して、爾<sup>い</sup>を<sup>い</sup>讚<sup>い</sup>榮<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>しめ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。



誦(しゆ) 經(あわれ) 主(しゆ)、憐(あわれ)めよ。主(しゆ)、憐(あわれ)めよ。主(しゆ)、憐(あわれ)めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光<sup>い</sup>榮<sup>い</sup>は<sup>い</sup>父<sup>い</sup>と<sup>い</sup>子<sup>い</sup>と<sup>い</sup>聖<sup>い</sup>神<sup>い</sup>に<sup>い</sup>歸<sup>い</sup>す、今<sup>い</sup>も<sup>い</sup>何<sup>い</sup>時<sup>い</sup>も<sup>い</sup>世<sup>い</sup>に<sup>い</sup>。ア<sup>い</sup>ミ<sup>い</sup>ン。

ヘルヴィムより<sup>とうと</sup>尊<sup>い</sup>く、セラフィムに<sup>ならび</sup>並<sup>い</sup>なく<sup>い</sup>榮<sup>い</sup>え、貞<sup>い</sup>操<sup>い</sup>を<sup>い</sup>壊<sup>い</sup>らず<sup>い</sup>して<sup>い</sup>神<sup>い</sup>言<sup>い</sup>を<sup>い</sup>生<sup>い</sup>み<sup>い</sup>し<sup>い</sup>實<sup>い</sup>の<sup>い</sup>

生<sup>しょうしんぢよ</sup>神<sup>なんぢ</sup>女<sup>あが</sup>たる<sup>ほ</sup>爾<sup>ほ</sup>を<sup>い</sup>崇<sup>い</sup>め<sup>い</sup>讃<sup>い</sup>む。

しんぶ しゆ な もつ ふく くだ  
神<sup>い</sup>父<sup>い</sup>よ、主<sup>い</sup>の<sup>い</sup>名<sup>い</sup>を<sup>い</sup>以<sup>い</sup>て<sup>い</sup>福<sup>い</sup>を<sup>い</sup>降<sup>い</sup>せ。

司(しゆ) 祭(あわれ) 主(しゆ) イ(われ) ス(われ) ス(われ) ハ(われ) リ(われ) ス(われ) ス(われ) 我(われ) 等(われ) の(われ) 神(われ) よ、吾(われ) が(われ) 諸(われ) 聖(われ) 神(われ) 父(われ) の(われ) 祈(われ) 禱(われ) に(われ) 依(われ) りて(われ) 我(われ) 等(われ) を(われ) 憐(われ) み(われ) 給(われ) え。

誦(しゆ) 經(あまれ) ア(あまれ) ミ(あまれ) ン(あまれ) 。

【 聖大ワシリイの祝文 】

主(しゆ)よ、主(しゆ)よ、我(われ)等(われ)を<sup>い</sup>晝<sup>い</sup>の<sup>い</sup>諸(われ)の<sup>い</sup>流<sup>い</sup>矢<sup>い</sup>より<sup>い</sup>脱<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>しめ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>者(われ)よ、我(われ)等(われ)を<sup>い</sup>闇<sup>い</sup>冥<sup>い</sup>に<sup>い</sup>行<sup>い</sup>く<sup>い</sup>諸(われ)

の<sup>い</sup>害<sup>い</sup>より<sup>い</sup>脱<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>しめ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)が(われ)手<sup>い</sup>を<sup>い</sup>擧<sup>い</sup>ぐる<sup>い</sup>を<sup>い</sup>晩<sup>い</sup>の<sup>い</sup>祭(われ)と<sup>い</sup>して<sup>い</sup>受<sup>い</sup>け<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)等(われ)に<sup>い</sup>過<sup>い</sup>なく、惡(われ)

に<sup>い</sup>誘(われ)われ<sup>い</sup>ずして、夜(われ)の<sup>い</sup>路(われ)を<sup>い</sup>過<sup>い</sup>らしめ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)等(われ)を<sup>い</sup>惡<sup>い</sup>魔<sup>い</sup>より<sup>い</sup>來<sup>い</sup>る<sup>い</sup>諸(われ)の<sup>い</sup>紛(われ)擾(われ)と<sup>い</sup>畏(われ)懼(われ)より<sup>い</sup>脱(われ)

れ<sup>い</sup>しめ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)等(われ)の<sup>い</sup>靈(われ)に<sup>い</sup>感(われ)動(われ)を<sup>い</sup>與<sup>い</sup>え、我(われ)等(われ)の<sup>い</sup>心(われ)に<sup>い</sup>畏<sup>い</sup>る<sup>い</sup>べき<sup>い</sup>義(われ)なる<sup>い</sup>爾(われ)の<sup>い</sup>審(われ)判(われ)に<sup>い</sup>對(われ)う<sup>い</sup>

べき<sup>い</sup>こと<sup>い</sup>を<sup>い</sup>慮(われ)らしめ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)等(われ)の<sup>い</sup>體(われ)を<sup>い</sup>爾(われ)を<sup>い</sup>畏<sup>い</sup>る<sup>い</sup>る<sup>い</sup>の<sup>い</sup>畏(われ)に<sup>い</sup>釘(われ)うち<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え、我(われ)等(われ)が(われ)地(われ)

に<sup>い</sup>在<sup>い</sup>る<sup>い</sup>肉(われ)慾(われ)を<sup>い</sup>殺<sup>い</sup>し<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)等(われ)が(われ)眠(われ)の<sup>い</sup>靜(われ)なる<sup>い</sup>時(われ)にも<sup>い</sup>爾(われ)の<sup>い</sup>誠(われ)を<sup>い</sup>見<sup>い</sup>る<sup>い</sup>に<sup>い</sup>因(われ)りて<sup>い</sup>照(われ)さ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>

を<sup>い</sup>得<sup>い</sup>しめ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)等(われ)より<sup>い</sup>諸(われ)の<sup>い</sup>妄(われ)想(われ)と<sup>い</sup>害(われ)ある<sup>い</sup>慾(われ)と<sup>い</sup>を<sup>い</sup>除<sup>い</sup>き<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え。我(われ)等(われ)を<sup>い</sup>祈(われ)禱(われ)の<sup>い</sup>時(われ)に<sup>い</sup>興(われ)し<sup>い</sup>

て、我(われ)が(われ)信(われ)を<sup>い</sup>固(われ)め、爾(われ)の<sup>い</sup>誠(われ)を<sup>い</sup>行(われ)う<sup>い</sup>に<sup>い</sup>進(われ)ましめ<sup>い</sup>給<sup>い</sup>え、爾(われ)が(われ)獨(われ)生子(われ)の<sup>い</sup>慈(われ)憐(われ)と<sup>い</sup>仁(われ)慈(われ)に

よ 因りてなり。 <sup>なんぢ</sup>爾は彼と至聖至仁生命を施す <sup>なんぢ</sup>爾の神と偕に崇め讃めらる、 <sup>いま</sup>今も何時も  
よよ 世に、アミン。

<sup>きた</sup>來れ、 <sup>われら</sup>我等の王・ <sup>おう</sup>神に叩 <sup>かみ</sup>拜せん、

<sup>きた</sup>來れ、 <sup>われら</sup>ハリストス・ <sup>おう</sup>我等の王・ <sup>かみ</sup>神に叩 <sup>こうはい</sup>拜俯伏せん、

<sup>きた</sup>來れ、 <sup>われら</sup>ハリストス・ <sup>おう</sup>我等の王と神の前に叩 <sup>かみ</sup>拜俯伏せん、

## 【 第50聖詠 】

<sup>かみ</sup>神よ、 <sup>なんぢ</sup>爾の大なる <sup>おおい</sup>憐に因りて我を <sup>あわれみ</sup>憐み、 <sup>われ</sup>爾が <sup>なんぢ</sup>恵の多きに因りて <sup>おほ</sup>我の不法を  
<sup>け</sup>抹し <sup>たま</sup>給え。 <sup>しばしば</sup>屢 <sup>われ</sup>我を我が不法より <sup>ふほう</sup>洗い、 <sup>あら</sup>我を我が <sup>つみ</sup>罪より <sup>きよ</sup>清め <sup>たま</sup>給え、 <sup>けだし</sup>蓋 <sup>われ</sup>我は我が不法を  
<sup>し</sup>知る、 <sup>われ</sup>我の <sup>つみ</sup>罪は常に我が <sup>つね</sup>前に在り。 <sup>われ</sup>我は <sup>なんぢ</sup>爾 <sup>ひとり</sup>獨 <sup>なんぢ</sup>爾に <sup>つみ</sup>罪を犯し、 <sup>おほ</sup>惡を <sup>なんぢ</sup>爾の <sup>め</sup>目の前に  
<sup>おこな</sup>行 <sup>なんぢ</sup>えり、 <sup>なんぢ</sup>爾は <sup>なんぢ</sup>爾の <sup>しんだん</sup>審斷に <sup>ぎ</sup>義にして、 <sup>なんぢ</sup>爾の <sup>さいばん</sup>裁判に <sup>おほ</sup>公 <sup>み</sup>なり。 <sup>われ</sup>視よ、 <sup>ふほう</sup>我は不法に於て  
<sup>はら</sup>妊まれ、 <sup>わ</sup>我が <sup>は</sup>母は <sup>つみ</sup>罪に於て <sup>おほ</sup>我を生めり。 <sup>われ</sup>視よ、 <sup>なんぢ</sup>爾は <sup>み</sup>心に <sup>なんぢ</sup>眞實のあるを <sup>あい</sup>愛し、 <sup>われ</sup>我が <sup>うち</sup>衷に  
<sup>おほ</sup>於て <sup>ちえ</sup>智慧を <sup>われ</sup>我に <sup>あらわ</sup>顯 <sup>もつ</sup>せり。 <sup>われ</sup>ヒソ <sup>そそ</sup>プを以て <sup>しか</sup>我に <sup>われ</sup>沃げ、 <sup>われ</sup>然せば <sup>いさぎよ</sup>我 <sup>われ</sup>潔 <sup>あら</sup>くならん、 <sup>われ</sup>我を <sup>あら</sup>滌え、  
<sup>しか</sup>然せば <sup>われ</sup>我 <sup>しろ</sup>雪より <sup>われ</sup>白 <sup>よろこび</sup>くならん。 <sup>たのしみ</sup>我に <sup>き</sup>喜 <sup>たま</sup>と <sup>しか</sup>樂 <sup>なんぢ</sup>とを <sup>おほ</sup>聞かせ <sup>ほね</sup>給え、 <sup>なんぢ</sup>然せば <sup>おほ</sup>爾に <sup>ほね</sup>折られし <sup>ほね</sup>骨  
<sup>よろこ</sup>は <sup>なんぢ</sup>悦 <sup>かんばせ</sup>ばん。 <sup>われ</sup>爾の <sup>つみ</sup>顔 <sup>さ</sup>を我が <sup>わ</sup>罪より <sup>ふほう</sup>避け、 <sup>け</sup>我が <sup>かみ</sup>盡 <sup>いさぎよ</sup>くの不法を <sup>いさぎよ</sup>抹し <sup>いさぎよ</sup>給え。 <sup>いさぎよ</sup>神よ、 <sup>いさぎよ</sup>潔 <sup>いさぎよ</sup>き  
<sup>こころ</sup>心 <sup>われ</sup>を我に <sup>つく</sup>造れ、 <sup>ただ</sup>正 <sup>たましい</sup>しき <sup>われ</sup>靈 <sup>うち</sup>を我の <sup>あらた</sup>衷に <sup>たま</sup>改 <sup>われ</sup>め <sup>なんぢ</sup>給え。 <sup>かんばせ</sup>我を <sup>おほ</sup>爾の <sup>なか</sup>顔 <sup>なか</sup>より <sup>なか</sup>逐う <sup>なか</sup>こと <sup>なか</sup>母  
<sup>なんぢ</sup>れ、 <sup>せいしん</sup>爾の <sup>われ</sup>聖 <sup>と</sup>神 <sup>あ</sup>を我より <sup>なか</sup>取り <sup>なんぢ</sup>上 <sup>すくい</sup>ぐる <sup>よろこび</sup>こと <sup>われ</sup>母 <sup>かえ</sup>れ。 <sup>しゅさい</sup>爾が <sup>しゅさい</sup>救 <sup>しゅさい</sup>の <sup>しゅさい</sup>喜 <sup>しゅさい</sup>を我に <sup>しゅさい</sup>還 <sup>しゅさい</sup>せ、 <sup>しゅさい</sup>主 <sup>しゅさい</sup>宰 <sup>しゅさい</sup>たる  
<sup>しん</sup>神 <sup>もつ</sup>を以て <sup>われ</sup>我を <sup>かた</sup>固 <sup>たま</sup>め <sup>われ</sup>給え。 <sup>ふほう</sup>我不法の <sup>もの</sup>者に <sup>なんぢ</sup>爾 <sup>みち</sup>の <sup>おほ</sup>道 <sup>ふけん</sup>を <sup>もの</sup>教 <sup>なんぢ</sup>えん、 <sup>かえ</sup>不 <sup>かえ</sup>虔 <sup>かえ</sup>の <sup>かえ</sup>者は <sup>かえ</sup>爾 <sup>かえ</sup>に <sup>かえ</sup>歸 <sup>かえ</sup>らんと  
<sup>かみ</sup>す。 <sup>わ</sup>神よ、 <sup>すくい</sup>我が <sup>かみ</sup>救 <sup>われ</sup>の <sup>ち</sup>神よ、 <sup>すく</sup>我を <sup>たま</sup>血より <sup>しか</sup>救 <sup>わ</sup>い <sup>なんぢ</sup>給え、 <sup>ぎ</sup>然せば <sup>あ</sup>我が <sup>あ</sup>舌 <sup>あ</sup>は <sup>あ</sup>爾 <sup>あ</sup>の <sup>あ</sup>義 <sup>あ</sup>を <sup>あ</sup>讃 <sup>あ</sup>め <sup>あ</sup>揚 <sup>あ</sup>げん。  
<sup>しゅ</sup>主 <sup>わ</sup>よ、 <sup>くち</sup>我が <sup>ひら</sup>唇 <sup>しか</sup>を <sup>なんぢ</sup>啓 <sup>さんび</sup>け、 <sup>あ</sup>然せば <sup>あ</sup>我が <sup>あ</sup>口 <sup>あ</sup>は <sup>あ</sup>爾 <sup>あ</sup>の <sup>あ</sup>讚 <sup>あ</sup>美 <sup>あ</sup>を <sup>あ</sup>揚 <sup>あ</sup>げん、 <sup>あ</sup>蓋 <sup>あ</sup>爾 <sup>あ</sup>は <sup>あ</sup>祭 <sup>あ</sup>を <sup>あ</sup>欲 <sup>あ</sup>せず、  
<sup>ほつ</sup>欲 <sup>われ</sup>せば <sup>たてまつ</sup>我 <sup>なんぢ</sup>此 <sup>よるこ</sup>を <sup>かみ</sup>獻 <sup>よるこ</sup>らん、 <sup>まつり</sup>爾 <sup>まつり</sup>は <sup>まつり</sup>燔 <sup>まつり</sup>祭 <sup>たましい</sup>を <sup>たましい</sup>喜 <sup>たましい</sup>ば <sup>たましい</sup>ず。 <sup>たましい</sup>神 <sup>たましい</sup>に <sup>たましい</sup>喜 <sup>たましい</sup>ば <sup>たましい</sup>る <sup>たましい</sup>祭 <sup>たましい</sup>は <sup>たましい</sup>痛 <sup>たましい</sup>悔 <sup>たましい</sup>の <sup>たましい</sup>靈 <sup>たましい</sup>  
<sup>つうかい</sup>なり、 <sup>けんそん</sup>痛 <sup>こころ</sup>悔 <sup>かみ</sup>して <sup>なんぢ</sup>謙 <sup>たま</sup>遜 <sup>しゅ</sup>なる <sup>なんぢ</sup>心 <sup>よ</sup>は、 <sup>おん</sup>神 <sup>おん</sup>よ、 <sup>おん</sup>爾 <sup>おん</sup>輕 <sup>おん</sup>ん <sup>おん</sup>じ <sup>おん</sup>給 <sup>おん</sup>わ <sup>おん</sup>ず。 <sup>おん</sup>主 <sup>おん</sup>よ、 <sup>おん</sup>爾 <sup>おん</sup>の <sup>おん</sup>恵 <sup>おん</sup>に <sup>おん</sup>因 <sup>おん</sup>り <sup>おん</sup>て <sup>おん</sup>恩 <sup>おん</sup>  
<sup>た</sup>を <sup>じょうえん</sup>シ <sup>た</sup>オン <sup>たま</sup>に <sup>そのとき</sup>垂 <sup>なんぢ</sup>れ、 <sup>まつり</sup>イ <sup>まつり</sup>エル <sup>まつり</sup>サ <sup>まつり</sup>リ <sup>まつり</sup>ム <sup>まつり</sup>の <sup>まつり</sup>城 <sup>まつり</sup> 垣 <sup>まつり</sup>を <sup>まつり</sup>建 <sup>まつり</sup>て <sup>まつり</sup>給 <sup>まつり</sup>え。 <sup>まつり</sup>其 <sup>まつり</sup>時 <sup>まつり</sup>に <sup>まつり</sup>爾 <sup>まつり</sup>義 <sup>まつり</sup>の <sup>まつり</sup>祭 <sup>まつり</sup>、 <sup>まつり</sup>獻 <sup>まつり</sup>物 <sup>まつり</sup>と <sup>まつり</sup>燔 <sup>まつり</sup>祭 <sup>まつり</sup>  
<sup>よるこ</sup>と <sup>う</sup>を <sup>そのとき</sup>喜 <sup>ひとびと</sup>び <sup>さいだん</sup>饗 <sup>こうし</sup>けん、 <sup>そな</sup>其 <sup>そな</sup>時 <sup>そな</sup>に <sup>そな</sup>人 <sup>そな</sup>人 <sup>そな</sup>爾 <sup>そな</sup>の <sup>そな</sup>祭 <sup>そな</sup>壇 <sup>そな</sup>に <sup>そな</sup>犢 <sup>そな</sup>を <sup>そな</sup>奠 <sup>そな</sup>えんと <sup>そな</sup>す。

## 【 イウデヤ王マナッシャの祝文 】

しゅぜんのうしや わ せんぞ およ ぎ すえ かみ なんぢ てん  
 主 全能者、吾が先祖アヴラアム、イサク、イアコフ、及び義なる裔の神よ、爾は天  
 ち そのすべ かざり つく なんぢ いましめ ことば うみ しば ふち と おそ しか  
 地と其都ての飾とを作り、爾が誠の言にて海を縛り、淵を閉ぢ、畏るべくして榮  
 えたる なんぢ な もつ これ ふういん ばんぶつ そのな おそ なんぢ ちから まえ おのの けだし  
 爾の名を以て之を封印せり、萬物は其名を恐れ、爾が力の前に戦く、蓋  
 なんぢ こうえい おごそか まえ だれ た あた ざいにん お なんぢ きび いかり た  
 爾が光榮の莊嚴なる前には誰も立つ能わず、罪人に於ける爾の厳しき怒は堪え  
 がた しか なんぢ けいやく あわれみ はか がた きわ がた けだしなんぢ じんじ かんにん  
 難し、然れども爾が契約の憐は測り難く、窮め難し、蓋爾は仁慈にして寛忍、  
 こうおん ひと ざいあく うれ しじょう しゅ なんぢしゅ なんぢ じんじ おお よ  
 鴻恩にして人の罪惡を憂うる至上の主なり。爾主よ、爾が仁慈の多きに依りて、  
 なんぢ まえ つみ おか もの つうかい しゃざい けいやく なんぢ じれん おお よ ざいにん  
 爾の前に罪を犯しし者に痛悔と赦罪とを契約し、爾が慈憐の多きに依りて、罪人  
 ため つうかい さだ すくい え たま ゆえ なんぢしゅ ぎじん かみ ぎ なんぢ まえ  
 の爲に痛悔を定めて救を得しめ給えり。故に爾主、義人の神よ、義にして爾の前  
 つみ おか ため つうかい た すなわちわれざいにん  
 に罪を犯さざりしアヴラアム、イサク、イアコフの爲には痛悔を立てず、乃我罪人の  
 ため これ た たま けだしわれつみ おか うみ まさご かず おお しゅ わ ふほう  
 爲に之を立て給えり。蓋我罪を犯ししこと海の砂の數よりも多し。主よ、我が不法  
 かぞ がた わ ふほう かぞ がた われ ふぎ おお よ あお てん たか み た  
 は數え難し、我が不法は數え難し、我は不義の多きに因りて、仰ぎて天の高きを見るに堪  
 えず。我は多くの鐵の鎖にて屈められ、我が首を擧ぐる能わず、暫時も安んずる能わ  
 いた けだしわれ なんぢ いか あく なんぢ まえ おか なんぢ むね したが なんぢ  
 ざるに至れり、蓋我は爾を怒らせ、惡を爾の前に犯し、爾の旨に循わず、爾  
 めい まも けが こと おこな いざない おお な いまわ ころろ ひざ かが なんぢ  
 の命を守らず、穢れし事を行ひ、誘惑を多く爲せり。今我が心の膝を屈めて、爾  
 じんじ たま いの しゅ われつみ おか われつみ おか われ わ ふほう し しか  
 に仁慈を賜うを祈る。主よ、我罪を犯せり、我罪を犯せり。我は我が不法を知る、然れ  
 なんぢ いの もと しゅ われ ゆる たま われ ゆる たま われ わ ふほう とも ほろ  
 ども爾に祈りて求む、主よ、我を赦し給え、我を赦し給え、我を我が不法と共に亡  
 なか なが わ あく おも なか われ ちごく さだ なか けだしかみ なんぢ つうかい  
 ぼす勿れ、永く我が惡を念う勿れ、我を地獄に定むる勿れ。蓋神よ、爾は痛悔す  
 もの かみ なんぢ じんじ かたぶ わ うえ あらわ なんぢ おおい あわれみ よ われふ  
 る者の神なり、爾の仁慈を傾けて我が上に顯し、爾の大なる憐に因りて我不  
 とう もの すく たま われい うちなんぢ あが ほ けだしてん しゅうぐん なんぢ ほ うた  
 當の者を救い給え、我生ける中爾を崇め讃めん、蓋天の衆軍は爾を讃め頌う、  
 こうえい なんぢ よよ き  
 光榮は爾に世世に歸す、アミン。

【 讃詞 】



しゅよ、われらをあわれめよ、われらをあわれ  
 主 我等憐 我等憐

めよ、われらざいにんなにをいうべきをし、  
我等罪人何を言知、  
ら、ただこのきとうをなんぢしゅさい、  
唯此祈祷爾主宰、  
にささげてい、う、われらをあわ、  
獻日我等憐、  
れめよ。、  
こうえいはちちとことせいしんにきす、  
光榮父子聖神に歸、  
しゅよわれらをあわれめよ、われらなんぢ、  
主我等憐我等爾、  
をたのめばな、り、われらをいたくい、  
恃怒、  
かるなか、れ、われらのふほうをおもうな、  
勿、  
か、れ、いまもじんじなるによってあわれ、  
今仁慈に因憐、  
みをと、れ、われらをもろもろのてき、  
垂我等諸敵、  
よりすくい、たまえ、なんぢはわれらのかみ、  
救給爾我等神、  
にて、われらはなんぢのたみ、なり、  
我等爾民。



み な な ん ぢ の て の つ く れ る も の に て 、 な ん ぢ の な  
皆 爾 手 作 者 爾 名  
を よ ぶ に よ る 。  
い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
さ ん び た る し ょ う し ん ぢ ょ よ 、 わ れ ら の た め に あ  
讃 美 生 神 女 我 等 爲 憐  
わ れ み の も ん を ひ ら け 、 な ん ぢ を た の む も  
門 開 爾 持 者  
の に ほ ろ ぶ る こ と な く 、 な ん ぢ に よ っ て わ ざ  
亡 爾 依 禍  
わ い を の が る る を え し め た ま え 、 な ん  
逃 得 給 爾  
ぢ ハ リ ス ト の た み の す く い な れ ば な り 。  
民 救

誦經) しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光 栄は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ  
ヘルヴィムより尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の

しょうしんぢょ なんぢ あが ほ  
生神女たる爾を崇め讃む。

しんぷ しゅ な もつ ふく くだ  
神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭) しゅ われら かみ わ しょせいしんぷ きとう よ われら あわれ たま  
主イイススハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈禱に依りて我等を憐み給え。

誦經) アミン。

しゅさいかみちぢぜんのおしや しゅどくせい こ およ せいしん ゆいいち しんせい ゆいいち  
主宰神父全能者、主獨生の子イイススハリストス及び聖神、唯一の神性、唯一



のうりよく われざいにん あわれ なんじ し ところ ほう もつ われふとう ぼく すく たま けだし  
の能力よ、我罪人を憐み、爾が知る所の法を以て我不當の僕を救い給え、蓋

なんぢ よよ あが ほ  
爾は世世に崇め讃めらる、アミン。

いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみのぞ しゅてん おう かみちち  
至高には光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王、神父

ぜんのうしや しゅどくせい こ およ せいしん なんぢ おおい こうえい よ  
全能者よ、主獨生の子イイススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光榮に因りて、

われらなんぢ あが なんぢ ほ あ なんぢ ふ おが なんぢ とうと うた なんぢ かんしゃ しゅ  
我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌い、爾に感謝す。主

かみ かみ こひつじ ちち こ よ つみ にな もの われら あわれ たま よ もろもろ つみ  
神よ、神の羔、父の子、世の罪を任いし者よ、我等を憐み給え、世の諸の罪を

にな もの われら いのり い たま ちち みぎ ざ もの われら あわれ たま なんぢ ひとり  
任いし者よ、我等の禱を納れ給え。父の右に坐する者よ、我等を憐み給え。爾は獨

せい なんぢ ひとりしゅ かみちち こうえい あらわ もの  
聖なり、爾は獨主イイススハリストス、神父の光榮を顯す者なればなり、アミン。

われやや なんぢ ほ あ なんぢ な よよ あが うた  
我夜夜に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌わん。

しゅ なんぢ よよわれら かくれが われかつ い しゅ われ あわれ わ たましい いや  
主よ、爾は世世我等の避所たり。我曾て言えり、主よ、我を憐み、我が靈を醫

たま われつみ なんぢ え しゅ なんぢ はし つ なんぢ むね おこな われ おし  
し給え、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行うを我に教

たま なんぢ われ かみ いのち みなもと なんぢ あ われらなんぢ ひかり おい ひかり み  
え給え、爾は我の神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀

あわれみ なんぢ し もの つね た たま  
ん。憐を爾を知る者に恒に垂れ給え。

しゅ われ まも つみ こ よ わた たま しゅわ せんぞ かみ なんぢ あが ほ  
主よ、我を守り罪なくして此の夜を度らせ給え。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めら

なんぢ な よよ とうと うた  
れ爾の名は世世に尊み歌わる、アミン。

しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え。主よ、爾は崇め讃めらる、

なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと  
爾の誠を我に訓え給え。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ

たま せい もの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ てら たま しゅ なんぢ  
給え。聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給え。主よ、爾の

あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き うた なんぢ き  
憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、

こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

受難週以外は直に【 第150聖詠 】を歌う。

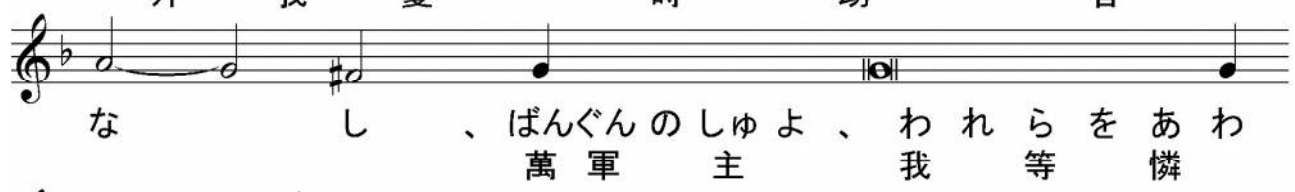
【 第150聖詠 】



ばんぐんのしゅよ、われらととも にせよ、なんぢ  
萬軍主我等偕 爾



のほかわがうれいのときにたすくるもの  
外我憂時助者



なし、ばんぐんのしゅよ、われらをあわ  
萬軍主我等憐



れみたまえ。



かみをそのせいしよにほめあげよ、かれをその  
神其聖所讚揚彼其



ゆうりよくのおおぞらにほめあげよ。  
有力穹蒼讚揚



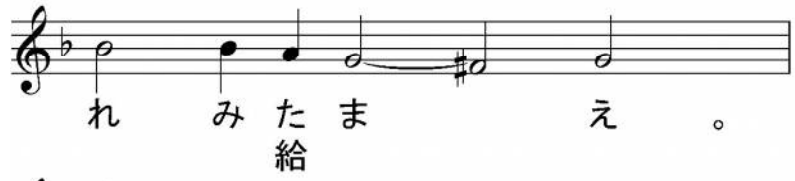
ばんぐんのしゅよ、われらとともにせよ、なんぢ  
萬軍主我等偕爾



のほかわがうれいのときにたすくるもの  
外我憂時助者



なし、ばんぐんのしゅよ、われらをあわ  
萬軍主我等憐



れみたまえ。



そのけんのうによりてかれをほめあげよ、その  
其權能依彼讚揚其



いとおごそかなるによりてかれをほめあげ  
至嚴依彼讚揚



よ。

ばんぐんのしゅよ、われらとともにせよ、なんぢ  
萬軍主我等借爾

のほかわがうれいのときにたすくるもの  
外我憂時助者

なし、ばんぐんのしゅよ、われらをあわ  
萬軍主我等憐

れみたまえ。  
給

ラッパのこえをもってかれをほめあげよ、きんとし  
角聲以彼讚揚琴瑟

つとをもってかれをほめあげよ。  
以彼讚揚

ばんぐんのしゅよ、われらとともにせよ、なんぢ  
萬軍主我等借爾

のほかわがうれいのときにたすくるもの  
外我憂時助者

なし、ばんぐんのしゅよ、われらをあわ  
萬軍主我等憐

れみたまえ。  
給

つづみとまいとをもってかれをほめあげよ、い  
鼓舞以彼讚揚絃

ととしょうとをもってかれをほめあげよ。  
簫以彼讚揚

ばんぐんのしゅよ、われらとともにせよ、なんぢ  
 萬軍主我等借爾

のほかわがうれいのときにたすくるもの  
 外我憂時助者

なし、ばんぐんのしゅよ、われらをあわ  
 萬軍主我等憐

れみたまえ。

わせいよのばつをもつてかれをほめあげよ、たい  
 和聲鈴以彼讃揚大

せいよのばつをもつてかれをほめあげよ。およそ  
 聲鈴以彼讃揚凡

いきあるものはしゅをほめあげよ。  
 呼吸者主讃揚

ばんぐんのしゅよ、われらとともにせよ、なんぢ  
 萬軍主我等借爾

のほかわがうれいのときにたすくるもの  
 外我憂時助者

なし、ばんぐんのしゅよ、われらをあわ  
 萬軍主我等憐

れみたまえ。

かみをそのせいよにほめあげよ、かれをその  
 神其聖所讃揚彼其

ゆうりよくの おおぞらに ほめあげよ。  
 有 力 の 穹 蒼 に 讃 揚

ばんぐんのしゅよ、われらとともにせよ、なんぢ  
 萬 軍 主 我 等 偕 爾

のほかがうれいのときにたすくるもの  
 外 我 憂 時 助 者

な し、ばんぐんのしゅよ、われらをあわ  
 萬 軍 主 我 等 憐

れみたまえ。  
 給

こうえいはちちとこせいしんにきす。  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

しゅよ、もしわれらのためにいの  
 主 若 我 等 爲 祈

る、なんぢのせいしゃと、われらをあわ  
 爾 聖 者 我 等 憐

れむなんぢのじれんあらずば、われらいかでしよ  
 爾 慈 憐 我 等 如 何 諸

てんしよ りつねにさんえいせらるるのしゅ  
 天 使 常 讃 榮 主

をほめうと うをえん。こころをしるものよ、  
 讃 歌 得 心 知

われらのたましいをなだめたまえ。  
 我 等 靈 宥 め 給 え



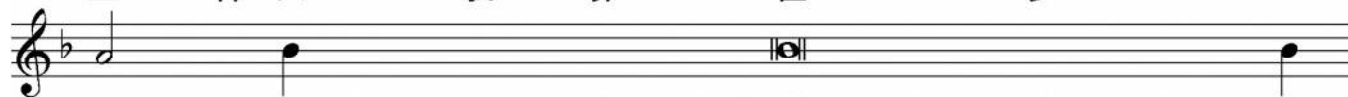
いまもいつもよよに、アミン。

今 何時 世世



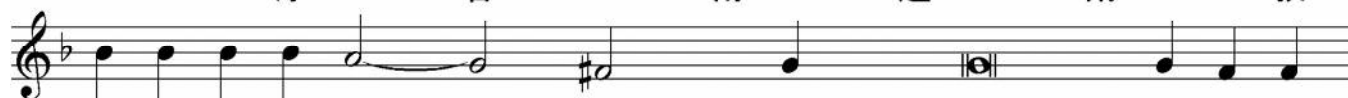
しょうしんぢよよ、わがつみははなはだお

生 神女 我 罪 甚 多



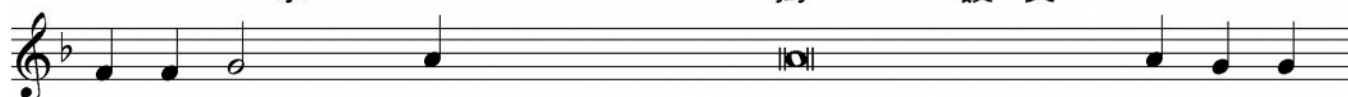
し、きよきものよ、なんぢにはしりつきてす

浄 者 爾 趨 附 救



くいをもとむ、ひとりさんびせらるる

求 獨 讚 美



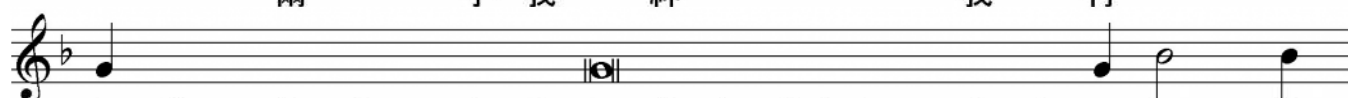
ものよ、わがやめるたましいをかえりみ

者 我 病 靈 願



て、なんぢのこわがかみにわがおこない

爾 子 我 神 我 行



しざいあくのゆるしをたまわんことをいのり

罪 惡 赦 賜 祈



たまえ。

給



しせいなるしょうしんぢよよ、わがいける

至 聖 生 神 女 我 生



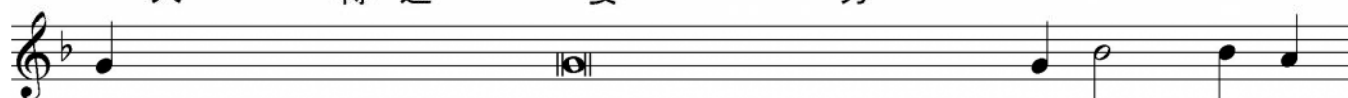
うちわれをすつるなかれ、われ

中 我 棄 勿 我



をひとのてんたつにゆだぬるなかれ、

人 轉 達 委 勿



すなわちみづからわれをまもりてすくいた給

乃 親 我 護 救 給

ま え 。 か み の は は よ 、 わ が た の み を  
 神 母 我 侍  
 も っ て こ と ご と く な ん ぢ に お わ し  
 以 悉 爾 負  
 む 、 ね が わ く は わ れ を な ん ぢ が お お い の し た  
 願 我 爾 お 覆 下  
 に ま も り た ま え 。  
 守 給

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
 誦經) 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

いづれ ひいづれ とき てん ち こうはいさんえい かんにん こうじ しぜん ぎじん  
 何 の日 何 の時にも、天にも地にも叩 拜 讚 榮せられ、寛 忍、鴻慈、至善にして義人を

あい ざいにん あわれ らいせい ふく やく よろづ もの すくい まね かみ なんぢ  
 愛し、罪人を 憐 め、來世の福を約して、萬 の者を 救 に招くハリストス神よ、爾

しゅ みづか わ こ とき いのり う われら いのち なんぢ いましめ む たま われら  
 主よ、親 ら我が此の時の 禱 をも受け、我等の生命を 爾 の 誠 に向わしめ給え、我等の

たましい せい からだ いさぎよ おもんばかり なお おもい きよ われら ことごと うれい  
 靈 を聖にし、體 を 潔 くし、 慮 を直くし、思 を淨くし、我等を 悉 くの憂

わざわい やまい すく なんぢ せい てんし もつ われら めぐ われら そのかこみ まも みちび  
 と 禍 と疾より救い、爾 の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其 圍 に衛り 導

しん いつ なんぢ ちか がた こうえい さと いた たま けだしなんぢ よよ あが  
 かれて、信の一なると、爾 の近づき難き光榮を悟るに至らせ給え、蓋 爾 は世々に崇

ほ  
 め讚めらる、アミン。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
 主、憐 めよ。主、憐 めよ。主、憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ  
 ヘルヴィムより 尊 く、セラフィムに 並 なく榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の

しょうしんぢよ なんぢ あが ほ  
 生 神女たる 爾 を崇め讚む。

しんぷ しゅ な もつ ふく くだ  
 神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭) かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんぢ かんばせ もつ われら てら ならび  
 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾 の 顔 を以て我等を照し、並に

われら あわれ たま  
 我等を 憐 め給え。

誦經) アミン。

※ 続けて早課を行う場合は、30 ページに飛ぶ。

晩堂課で終わる場合は直ちに次の【 聖エフレムの祝文 】。

【 聖エフレムの祝文 】

司祭) しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空談の 情 を我に與うる勿れ。

みさお へりくだり ころえ あい ころろ われなんぢ ぼく あた たま  
貞操と、謙 遜と、忍耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。

ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ  
嗚呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃め

らる、アミン。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、神よ我 罪人を浄め給え、

しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお  
主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空談の 情 を我に與うる勿れ。貞操

へりくだり ころえ あい ころろ われなんぢ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ  
と、謙 遜と、忍耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。嗚呼、主 王よ、我に我が罪

み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ  
を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

誦經) せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光 栄は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる  
至聖三者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を赦

せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
せ。聖なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給え。悉 く 爾 の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光 栄は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん  
天に在す我等の父よ、 願 は 爾 の名は聖とせられ、 爾 の國は來り、 爾 の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かね こんにちわれら あた たま われら  
に 行 わるるが如く、地にも 行 われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いぎない みちび なおわれら  
債 ある者を我等免すが如く、我等の 債 を免し給え。我等を 誘 に 導 かず、猶我等

きょうあく すく たま  
を凶 惡より救い給え。



司祭) けだし くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋、國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

誦經) アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

けがれ いざな く いた いさぎよ きよ どうていぢよ かみ よめ ぢよ  
穢なく、誘わるるなく、朽つるなくして、至りて潔く、清き童貞女・神の嫁・女

さい いとさか さん かみことば ひと あわ てん はな わ せい またてん あわ もの  
宰よ、最榮えたる産にて神言を人に合せ、天に離れたる我が性を復天に合せし者よ、

のぞみ もの ひとり のぞみ たたか もの たすけ はし つ もの ため そな まもり しゅう  
望なき者の獨の望と、戦う者の援よ、趨り附く者の爲に備えたる衛と、衆

ハリストティアニンの避所なる者よ、我不潔なる罪人、汚れたる思と言と行にて己

まつた ふとう もの な おこた ころろ よ たのしみ どれい な もの いと なか すなわち  
を全く不當の者と爲し、情れる心にて世の樂の奴隸と爲りし者を厭う勿れ、乃

じんじ かみ はは よ ひと あい ころろ もつ われざいにんふけつ もの あわれ わ  
仁慈なる神の母たるに因りて、人を愛する心を以て、我罪人不潔なる者を憐み、我が

けがれ くち なんぢ ささ きとう い はは いさみ もつ なんぢ こ わ しゅさいおよ かみ  
汚れたる口より爾に捧げる祈禱を納れ、母たる勇を以て、爾の子、吾が主宰及び神

いの たま かれ わ ため そのじんじ ふところ ひら わ かぞ がた ざいか おも われ  
に禱り給え、彼が我が爲に其仁慈の懷を開き、我が數え難き罪過を思わずして、我を

つうかい むか そのいましめ おこな れんたつ もの な ため あわれみふか いつくしみ  
痛悔に向わしめ、其誠を行に練達なる者と爲さん爲なり。憐深く、慈

ひろ ぜん あい よ こ せい お ねつしん てんたつしやおよ ふじよしゃ なんぢつね わ  
廣く、善を愛するに因りて、此の生に於ける熱心の轉達者及び扶助者よ、爾恒に我が

まえ た われ せ しょてき しりぞ われ すくい みちび わ た たましい りんじゅう  
前に立ちて、我を攻むる諸敵を退け、我を救に導き、我が堪えざる靈を臨終の

とき まも きょうあく まき みにく ぞう とお われ お おそ しんぱん ひ われ えいえん  
時に守り、凶惡なる魔鬼の醜き像を遠く我より逐い、畏るべき審判の日に我を永遠

くるしみ のが われ なんぢ こわ かみ い がた こうえい つ もの な たま わ  
の苦より脱れしめ、我を爾の子吾が神の言い難き光榮を嗣ぐ者と爲し給え、吾が

ぢよさい しせい しょうしんぢよ ねが われこれ え なんぢ てんたつ しゅご なんぢ こわ  
女宰、至聖なる生神女よ、願わくは我之を得ん、爾の轉達と守護と、爾の子吾が

しゅかみきゅうせいしゅ おんちよう じんじ よ ことごと こうえい せんき  
主神救世主イイススハリストスの恩寵と仁慈に因りてなり。悉くの光榮、尊貴、

ふくはい かれ かれ むげん ちち しせいしじんいのち ほどこ かれ しん き いま いつ よよ  
伏拜は彼と、彼の無原の父と、至聖至仁生命を施す彼の神とに歸す、今も何時も世に、

アミン。

しゅさい われらねむ もの からだ たましい いこい あた たま われら つみ くら  
主宰よ、我等眠らんとする者に體と靈との休息を與え給え、我等を罪の闇き

ねむり もろもろ やちゆう くら あんいつ まも しょよく うご おさ あくてき われら あぎむ  
眠と、諸の夜中の味き安逸より守り、諸慾の動くを抑え、惡敵が我等を欺き

い ところ ひや け わ にくたい たたかい しづ もろもろ ちじょうぶつたい おもんばかり た  
て射る所の火箭を滅し、我が肉體の闘を鎮め、諸の地上物體の慮を斷た

たま かみ われら けいせい ちえ ていけつ おもい さ ころろ やす ねむり  
しめ給え。神よ、我等に徹醒の智慧、貞潔の思、醒めたる心、安き眠、サタナより

きた よこしま ゆめ たま われら きとう とき おこ なんぢ いましめ おこな かた  
来る 邪なる夢なきを賜い、我等を祈禱の時に興して、爾の誠を行うに固め、

なんぢ おきて つね わ ちゆうしん おも てつや さんび われら たま なんぢちち こ せいしん  
爾の律を恒に我が中心に思わしめ、徹夜の讚美を我等に賜いて、爾父と子と聖神

いととうと おごそか な とうと うた あが ほ たま いま いつ よよ  
の最尊くして嚴なる名を尊み歌い、崇め讚めさせ給え、今も何時も世々に、アミン。

しえい えいていどうぢよ かみ はは われら きとう なんぢ こわ かみ たづさ なんぢ  
至榮なる永貞童女ハリストス神の母よ、我等の祈禱を爾の子吾が神に携え、爾に

よ われら たましい すく たま  
藉りて我等の靈を救わしめ給え。

わ たのみ ちち わ かくれが こ わ おおい せいしん せいさんしゃ こうえい なんぢ き  
我が憑持は父、我が避所は子、我が幟は聖神なり、聖三者よ、光榮は爾に歸す。

司祭) ハリストス神、我等の憑持よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光榮父子聖神歸今

いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ  
何時世々に、アミン。主憐主

あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ  
憐主憐主福降

せ。

司祭) しゅさいだいじんじ しゅ われら かみ しじょう われら ぢよさい しょうしん  
主宰大仁慈なる主イイススハリストス我等の神よ、至淨なる我等の女宰・生神

ぢよ えいていどうぢよ いのり いのち ほどこ とうと じゅうじか ちから むけい とうと  
女・永貞童女マリヤの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き

てんぐん こうえい とうと よげんしゃ ぜんく じゅせん こうえい さんび せいしと こうえい  
天軍、光榮なる尊き預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、光榮

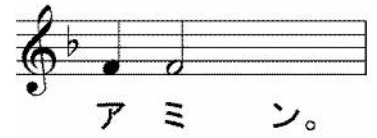
がいせん せいちめいしゃ こくしょうほうしん わ しよしんぶ せい ぎ かみ そふぼ  
なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる吾が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキ

およ およ なんぢ ことごと せいじん きとう よ われら きとう き い われら  
ム及びアンナ、及び爾が悉くの聖人の祈禱に因りて、我等の祈禱を聆き納れ我等に

ざいか ゆるし たま われら なんぢ つばさ かげ おお もろもろ きゅうてき われら とお  
罪過の赦を賜い、我等を爾が翼の蔭にて覆い、諸の仇敵を我等より遠ざけ、

われら いのち へいあん たま しゅ われら なんぢ せかい あわれ ならび われら たましい  
我等の生命を平安ならしめ給え、主よ、我等と爾の世界とを憐み、并に我等の靈

すく たま なんぢ ぜん ひと あい しゅ  
を救い給え、爾は善にして人を愛する主なればなり。



司祭) わくに てんのう およ くに つかさど もの ため いの  
吾が國の天皇、及び國を 司 る者の爲に禱らん。



司祭) きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしきょう およ お  
教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教セラフィム、及びハリストスに於ける  
われら ことごと けいていしまい ため  
我等の 悉 くの兄弟姉妹の爲、



司祭) われら うら およ われら あい もの ため  
我等を恨み、及び我等を愛する者の爲、



司祭) われら あわれ およ われら つと もの ため  
我等を 憐 み、及び我等に務むる者の爲、



司祭) われらふとう もの かわ いの たの ひとびと ため  
我等不當の者に代りて祈るを頼みし人人の爲、



司祭) とりこ もの すく ため  
擲 となりし者の救われんが爲、



司祭) <sup>たしゅつ われら しょふぼけいていしまい ため</sup> 他 出せる我等の諸父母兄弟姉妹の爲、



司祭) <sup>うみ わた もの ため</sup> 海を航る者の爲、



司祭) <sup>やまい ふ もの ため いの</sup> 病に臥す者の爲に禱らん。



司祭) <sup>またち み ゆたか ため</sup> 又地の果の豊ならん爲、



司祭) <sup>およ ことごと せいきょう たましい ため いの</sup> 及び 悉くの正教のハリストティアニンの靈の爲に禱らん。



司祭) <sup>けいけん しょおう せいきょう しょしゅきょう およ こ せいどう こんりゅうしゃ われら ふぼ すで す</sup> 敬虔の諸王、正教の諸主教、及び此の聖堂の建立者、我等の父母、已に過

<sup>さ われら ことごと ふそけいてい こ ところ しょほう ほうむ せいきょう もの きおく</sup> ぎ去りし我等の 悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られる正教の者を記憶

<sup>かれら ため い</sup> して、彼等の爲にも曰わん、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>しゅ</sup>主、<sup>われら</sup>イイスス<sup>かみ</sup>ハリストス我等の<sup>わ</sup>神よ、<sup>しよせいしんぶ</sup>吾が諸聖神父の<sup>きとう</sup>祈禱に依りて我等を<sup>われら</sup>憐<sup>あわれ</sup>み<sup>たま</sup>給え。

ア ミ ン。

【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の う 、 お よ び  
神 我 國 天 皇 及

く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ  
國 司 者 我 等 府 主

き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う  
教 及 悉 正 教

の ハ ス テ ィ ア ン 等 ら を 、 い く と せ に も ま も り  
を 幾 歳 護

た ま え 。

※ 晩堂課終わり

※ 早課を続けて行う場合

誦經) <sup>しゅあわれ</sup>主 <sup>しゅあわれ</sup>憐めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 <sup>しゅあわれ</sup>憐めよ、<sup>しゅあわれ</sup>主 <sup>しゅあわれ</sup>憐めよ、

<sup>けがれ</sup>穢なく、<sup>いざな</sup>誘わるるなく、<sup>く</sup>朽つるなくして、<sup>いた</sup>至りて <sup>いさぎよ</sup>潔く、<sup>きよ</sup>清き童貞女・<sup>どうていちよ</sup>神の嫁・<sup>かみ</sup>よめ <sup>ぢよ</sup>女  
<sup>さい</sup>幸よ、<sup>いとさか</sup>最榮えたる産にて <sup>さん</sup>神 <sup>かみことば</sup>言を <sup>ひと</sup>人に <sup>あわ</sup>合せ、<sup>てん</sup>天に <sup>はな</sup>離れたる我が <sup>わ</sup>性を <sup>せい</sup>復 <sup>またてん</sup>天に <sup>あわ</sup>合せし者よ、  
<sup>のぞみ</sup>望なき者の <sup>もの</sup>獨 <sup>ひとり</sup>の <sup>のぞみ</sup>望と、<sup>たたか</sup>戦う者の <sup>もの</sup>援 <sup>たすけ</sup>よ、<sup>はし</sup>趨り <sup>つ</sup>附く者の <sup>もの</sup>爲に <sup>ため</sup>備えたる <sup>そな</sup>衛と、<sup>まもり</sup>衆  
<sup>ハリスティアニン</sup>の <sup>かくれが</sup>避 <sup>もの</sup>所なる者よ、<sup>われふけつ</sup>我不潔なる <sup>ざいにん</sup>罪人、<sup>けが</sup>汚れたる <sup>おもい</sup>思 <sup>ことば</sup>と言 <sup>おこない</sup>と行 <sup>おのれ</sup>にて己  
<sup>まつた</sup>を <sup>ふとう</sup>全く <sup>もの</sup>不當の者 <sup>な</sup>と爲し、<sup>おこた</sup>情 <sup>こころ</sup>れる <sup>よ</sup>心 <sup>たのしみ</sup>にて <sup>どれい</sup>世の <sup>な</sup>樂 <sup>もの</sup>の <sup>いと</sup>奴隷 <sup>なか</sup>と爲りし者 <sup>すなわち</sup>を <sup>な</sup>厭 <sup>な</sup>う <sup>な</sup>勿れ、<sup>な</sup>乃  
<sup>じんじ</sup>仁慈なる <sup>かみ</sup>神の <sup>はは</sup>母 <sup>よ</sup>たるに <sup>ひと</sup>困りて、<sup>あい</sup>人を <sup>こころ</sup>愛 <sup>もつ</sup>する <sup>われざいにんふけつ</sup>心 <sup>もの</sup>を <sup>あわれ</sup>以 <sup>わ</sup>て、<sup>わ</sup>我 <sup>ざいにん</sup>罪人 <sup>ふけつ</sup>不潔なる <sup>もの</sup>者を <sup>あわれ</sup>憐 <sup>わ</sup>み、<sup>わ</sup>我が  
<sup>けが</sup>汚れたる <sup>くち</sup>口 <sup>なんぢ</sup>より <sup>ささ</sup>爾 <sup>きとう</sup>に <sup>い</sup>捧 <sup>はは</sup>げる <sup>いさみ</sup>祈禱 <sup>もつ</sup>を <sup>なんぢ</sup>納 <sup>こ</sup>れ、<sup>わ</sup>母 <sup>しゅさい</sup>たる <sup>およ</sup>勇 <sup>かみ</sup>を <sup>かみ</sup>以 <sup>かみ</sup>て、<sup>かみ</sup>爾 <sup>かみ</sup>の子、<sup>かみ</sup>吾 <sup>かみ</sup>が <sup>かみ</sup>主 <sup>かみ</sup>宰 <sup>かみ</sup>及 <sup>かみ</sup>び <sup>かみ</sup>神  
<sup>い</sup>に <sup>たま</sup>禱 <sup>かれ</sup>り <sup>わ</sup>給 <sup>ため</sup>え、<sup>そのじんじ</sup>彼 <sup>ふところ</sup>が <sup>ひら</sup>我が <sup>わ</sup>爲 <sup>かぞ</sup>に <sup>がた</sup>其 <sup>ざいか</sup>仁慈 <sup>おも</sup>の <sup>われ</sup>懷 <sup>われ</sup>を <sup>われ</sup>開 <sup>われ</sup>き、<sup>われ</sup>我 <sup>われ</sup>が <sup>われ</sup>數 <sup>われ</sup>え <sup>われ</sup>難 <sup>われ</sup>き <sup>われ</sup>罪 <sup>われ</sup>過 <sup>われ</sup>を <sup>われ</sup>思 <sup>われ</sup>わ <sup>われ</sup>ず <sup>われ</sup>して、<sup>われ</sup>我 <sup>われ</sup>を  
<sup>つうかい</sup>痛 <sup>むか</sup>悔 <sup>そのいましめ</sup>に <sup>おこな</sup>向 <sup>れんたつ</sup>わ <sup>もの</sup>し <sup>な</sup>め、<sup>な</sup>其 <sup>ため</sup>誠 <sup>あわれみふか</sup>を <sup>いつくしみ</sup>行 <sup>いつくしみ</sup>う <sup>いつくしみ</sup>に <sup>いつくしみ</sup>練 <sup>いつくしみ</sup>達 <sup>いつくしみ</sup>なる <sup>いつくしみ</sup>者 <sup>いつくしみ</sup>と <sup>いつくしみ</sup>爲 <sup>いつくしみ</sup>さん <sup>いつくしみ</sup>爲 <sup>いつくしみ</sup>なり。<sup>いつくしみ</sup>憐 <sup>いつくしみ</sup>深 <sup>いつくしみ</sup>く、<sup>いつくしみ</sup>慈  
<sup>ひろ</sup>廣 <sup>ぜん</sup>く、<sup>あい</sup>善 <sup>よ</sup>を <sup>こ</sup>愛 <sup>せい</sup>する <sup>お</sup>に <sup>ねつしん</sup>困 <sup>てんたつしやおよ</sup>りて、<sup>ふじよしゃ</sup>此 <sup>なんぢつね</sup>の <sup>わ</sup>生 <sup>わ</sup>に <sup>わ</sup>於 <sup>わ</sup>ける <sup>わ</sup>熱 <sup>わ</sup>心 <sup>わ</sup>の <sup>わ</sup>轉 <sup>わ</sup>達 <sup>わ</sup>者 <sup>わ</sup>及 <sup>わ</sup>び <sup>わ</sup>扶 <sup>わ</sup>助 <sup>わ</sup>者 <sup>わ</sup>よ、<sup>わ</sup>爾 <sup>わ</sup>恒 <sup>わ</sup>に <sup>わ</sup>我が  
<sup>まえ</sup>前 <sup>た</sup>に <sup>われ</sup>立 <sup>せ</sup>ちて、<sup>しよてき</sup>我 <sup>しりぞ</sup>を <sup>われ</sup>攻 <sup>すくい</sup>む <sup>みちび</sup>る <sup>わ</sup>諸 <sup>わ</sup>敵 <sup>わ</sup>を <sup>わ</sup>退 <sup>たましい</sup>け、<sup>りんじゅう</sup>我 <sup>りんじゅう</sup>を <sup>りんじゅう</sup>救 <sup>りんじゅう</sup>に <sup>りんじゅう</sup>導 <sup>りんじゅう</sup>き、<sup>りんじゅう</sup>我 <sup>りんじゅう</sup>が <sup>りんじゅう</sup>堪 <sup>りんじゅう</sup>え <sup>りんじゅう</sup>ざる <sup>りんじゅう</sup>靈 <sup>りんじゅう</sup>を <sup>りんじゅう</sup>臨 <sup>りんじゅう</sup>終 <sup>りんじゅう</sup>の  
<sup>とき</sup>時 <sup>まも</sup>に <sup>きょうあく</sup>守 <sup>まき</sup>り、<sup>みにく</sup>凶 <sup>ぞう</sup>惡 <sup>とお</sup>なる <sup>われ</sup>魔 <sup>お</sup>鬼 <sup>お</sup>の <sup>お</sup>醜 <sup>しんぱん</sup>き <sup>ひ</sup>像 <sup>われ</sup>を <sup>えい</sup>遠 <sup>えん</sup>く <sup>えん</sup>我 <sup>えん</sup>より <sup>えん</sup>逐 <sup>えん</sup>い、<sup>えん</sup>畏 <sup>えん</sup>る <sup>えん</sup>べき <sup>えん</sup>審 <sup>えん</sup>判 <sup>えん</sup>の <sup>えん</sup>日 <sup>えん</sup>に <sup>えん</sup>我 <sup>えん</sup>を <sup>えん</sup>永 <sup>えん</sup>遠  
<sup>くるしみ</sup>の <sup>の</sup>苦 <sup>われ</sup>より <sup>なんぢ</sup>脱 <sup>こわ</sup>れ <sup>かみ</sup>し <sup>い</sup>め、<sup>がた</sup>我 <sup>こうえい</sup>を <sup>つ</sup>爾 <sup>もの</sup>の <sup>な</sup>子 <sup>たま</sup>吾 <sup>わ</sup>が <sup>わ</sup>神 <sup>わ</sup>の <sup>わ</sup>言 <sup>わ</sup>い <sup>わ</sup>難 <sup>わ</sup>き <sup>わ</sup>光 <sup>わ</sup>榮 <sup>わ</sup>を <sup>わ</sup>嗣 <sup>わ</sup>ぐ <sup>わ</sup>者 <sup>わ</sup>と <sup>わ</sup>爲 <sup>わ</sup>し <sup>わ</sup>給 <sup>わ</sup>え、<sup>わ</sup>吾 <sup>わ</sup>が  
<sup>ぢよさい</sup>女 <sup>しせい</sup>宰 <sup>しょうしんぢよ</sup>、<sup>ねが</sup>至 <sup>われこれ</sup>聖 <sup>え</sup>なる <sup>なんぢ</sup>生 <sup>てんたつ</sup>神 <sup>しゅご</sup>女 <sup>なんぢ</sup>よ、<sup>こわ</sup>願 <sup>こわ</sup>わ <sup>こわ</sup>く <sup>こわ</sup>は <sup>こわ</sup>我 <sup>こわ</sup>之 <sup>こわ</sup>を <sup>こわ</sup>得 <sup>こわ</sup>ん、<sup>こわ</sup>爾 <sup>こわ</sup>の <sup>こわ</sup>轉 <sup>こわ</sup>達 <sup>こわ</sup>と <sup>こわ</sup>守 <sup>こわ</sup>護 <sup>こわ</sup>と、<sup>こわ</sup>爾 <sup>こわ</sup>の <sup>こわ</sup>子 <sup>こわ</sup>吾 <sup>こわ</sup>が  
<sup>しゅかみきゆうせいしゅ</sup>主 <sup>おんちよう</sup>神 <sup>じんじ</sup>救 <sup>よ</sup>世 <sup>ことごと</sup>主 <sup>こうえい</sup>イ <sup>そんき</sup>イス <sup>そんき</sup>ス <sup>そんき</sup>ハ <sup>そんき</sup>リス <sup>そんき</sup>ト <sup>そんき</sup>ス <sup>そんき</sup>の <sup>そんき</sup>恩 <sup>そんき</sup>寵 <sup>そんき</sup>と <sup>そんき</sup>仁 <sup>そんき</sup>慈 <sup>そんき</sup>に <sup>そんき</sup>困 <sup>そんき</sup>り <sup>そんき</sup>て <sup>そんき</sup>な <sup>そんき</sup>り。<sup>そんき</sup>悉 <sup>そんき</sup>く <sup>そんき</sup>の <sup>そんき</sup>光 <sup>そんき</sup>榮 <sup>そんき</sup>、<sup>そんき</sup>尊 <sup>そんき</sup>貴 <sup>そんき</sup>、  
<sup>ふくはい</sup>伏 <sup>かれ</sup>拜 <sup>かれ</sup>は <sup>むげん</sup>彼 <sup>ちち</sup>と、<sup>しせいしじんいのち</sup>彼 <sup>ほどこ</sup>の <sup>かれ</sup>無 <sup>しん</sup>原 <sup>き</sup>の <sup>いま</sup>父 <sup>いつ</sup>と、<sup>よよ</sup>至 <sup>よよ</sup>聖 <sup>よよ</sup>至 <sup>よよ</sup>仁 <sup>よよ</sup>生 <sup>よよ</sup>命 <sup>よよ</sup>を <sup>よよ</sup>施 <sup>よよ</sup>す <sup>よよ</sup>彼 <sup>よよ</sup>の <sup>よよ</sup>神 <sup>よよ</sup>と <sup>よよ</sup>に <sup>よよ</sup>歸 <sup>よよ</sup>す、<sup>よよ</sup>今 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>何 <sup>よよ</sup>時 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>世 <sup>よよ</sup>世 <sup>よよ</sup>に、

アミン。

【 聖エフレムの祝文 】

司祭) <sup>しゅ</sup>主、<sup>わ</sup>吾 <sup>いのち</sup>が <sup>しゅさい</sup>生命 <sup>おこたり</sup>の主 <sup>もだえ</sup>宰 <sup>しのぎ</sup>よ、<sup>むだごと</sup>怠 <sup>こころ</sup>惰 <sup>われ</sup>と、<sup>あた</sup>愁 <sup>なか</sup>悶 <sup>なか</sup>と、<sup>なか</sup>陵 <sup>なか</sup>駕 <sup>なか</sup>と、<sup>なか</sup>空 <sup>なか</sup>談 <sup>なか</sup>の <sup>なか</sup>情 <sup>なか</sup>を <sup>なか</sup>我 <sup>なか</sup>に <sup>なか</sup>與 <sup>なか</sup>う <sup>なか</sup>る <sup>なか</sup>勿 <sup>なか</sup>れ。

<sup>みさお</sup>貞 <sup>へりくだり</sup>操 <sup>こらえ</sup>と、<sup>あい</sup>謙 <sup>こころ</sup>遜 <sup>われなんぢ</sup>と、<sup>ぼく</sup>忍 <sup>あた</sup>耐 <sup>たま</sup>と、<sup>たま</sup>愛 <sup>たま</sup>の <sup>たま</sup>情 <sup>たま</sup>を <sup>たま</sup>我 <sup>たま</sup>爾 <sup>たま</sup>の <sup>たま</sup>僕 <sup>たま</sup>に <sup>たま</sup>與 <sup>たま</sup>え <sup>たま</sup>給 <sup>たま</sup>え。

<sup>ああ</sup>嗚 <sup>しゅおう</sup>呼 <sup>われ</sup>、<sup>わ</sup>主 <sup>つみ</sup>王 <sup>み</sup>よ、<sup>わ</sup>我 <sup>わ</sup>に <sup>わ</sup>我が <sup>わ</sup>罪 <sup>わ</sup>を見 <sup>わ</sup>、<sup>わ</sup>我 <sup>わ</sup>が <sup>わ</sup>兄 <sup>わ</sup>弟 <sup>わ</sup>を <sup>わ</sup>議 <sup>わ</sup>せ <sup>わ</sup>ざる <sup>わ</sup>を <sup>わ</sup>賜 <sup>わ</sup>え、<sup>わ</sup>蓋 <sup>わ</sup>爾 <sup>わ</sup>は <sup>わ</sup>世 <sup>わ</sup>世 <sup>わ</sup>に <sup>わ</sup>崇 <sup>わ</sup>め <sup>わ</sup>讃 <sup>わ</sup>め

らる、アミン。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま  
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと こころ われ あた なか みさお  
主、吾が生命の主 宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與うる勿れ。貞操

へりくだり こらえ あい こころ われなんぢ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ  
と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與え給え。嗚呼、主王よ、我に我が罪

み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ  
を見、我が兄弟を議せざるを賜え、蓋爾は世世に崇め讃めらる、アミン。

※ 早課の【 六段聖詠 】へ。